

令和5年度 姫路市大学発まちづくり研究助成事業

「灘のけんか祭り」の成立と展開 －なぜ神輿をぶつけあうのか－



姫路大学教育学部 「播磨史ヒストリア」
令和6年3月

目 次

「灘のけんか祭り」の成立と展開－なぜ神輿をぶつけあうのか－（和田幸司）	1
はじめに	1
1 志多羅神上洛事件と八幡神	1
2 18・19世紀における例大祭の状況と播磨国的情勢	3
3 単元の内容選択原理と構想	6
(1) 授業の内容選択原理からみた教材の有効性	6
(2) 歴史的事象の具体を通した単元の実際	7
①単元名 「灘のけんか祭りの成立と展開」	7
②単元目標	7
③指導計画	8
(3) 学習の流れと実際	13
(4) 授業資料スライド第1時	16
(5) 授業資料スライド第4時	24
おわりに	31
ゼミ生から	
「灘のけんか祭り」を学んで（金澤悠斗）	35
「灘のけんか祭り」を学んで（田村 渉）	38

「灘のけんか祭り」の成立と展開

－なぜ神輿をぶつけあうのか－

播磨史ヒストリア

姫路大学 教育学部

教授 和田 幸司

はじめに

筆者はさきに、神輿渡御の神幸祭としての松原別宮⁽¹⁾ 放生会の特質を石清水八幡宮放生会（以下、「石清水放生会」と表記）のそれと比較類推する手法をとり、松原別宮放生会の存在の事実、ならびに、その特質を考察した⁽²⁾。

その結果、松原八幡神社秋季例大祭（以下、「例大祭」と表記）の原初形態である松原別宮放生会が神事的性格の強い神輿渡御の神幸祭であり、天変地異をめぐる社会危機と淨穢観念・祟観念との関わりのなかで、宗教イデオロギーが広く定着していく様相を石清水八幡宮の豊富な史料群によって類推した。特に、「穢」「祟」の関係性のなかに放生会を定置することで、天変地異や感染症の流行など社会危機に対して、どのように放生会が関わってきたのかが明らかとなり、中世における神輿存在の意義を垣間見ることができた。しかしながら、近世から近代において、なぜ神輿をぶつけ合うまでに到ったのかについては課題として残ったままであった。

そこで、本稿では「穢観念」「祟観念」の関係性のなかで定置していた中世における神輿の存在意義を、天慶8年（945）に志多羅神上洛の流言とともに、志多羅神の神輿が摂津国河辺郡・豊島郡・島下郡などを経て、石清水八幡宮まで群衆によって担送された「志多羅神上洛事件」によって考察する。そして、時代は下るが、宝暦8年（1758）「八幡宮御神事御規式定」（以下、「規式定」と表記）によって、氏子の主体性と社会不安を解消するための新たな精神性の高まりについて検討したい。

さらに、これまでの研究「灘のけんか祭り」の成立と展開について、学校教育（中学生を想定）で、どのように授業化するのかについて、その試案を明らかにしたい。

1 志多羅神上洛事件と八幡神

例大祭の主役は御神体を乗せる神輿をぶつけ合う「神輿合わせ」である。この「神輿

合わせ」がどのようにして成立したのかは定かでない。「松原八幡宮略記」によると、「抑々当社の地は神功皇后三韓征伐の御時龍舟を懸けたまひし旧跡也⁽³⁾」とあり、この古事が転じて神輿を激しくぶつけあっているという口伝、および、「ごうなおとし（ゴイナオトシ）⁽⁴⁾」という神事が伝えられる。激しくぶつけ合うほど神意にかなうとされている。

今日、明確に神輿の存在を知ることのできる初見史料は「志多羅神上洛事件」に関する史料である。醍醐天皇第4皇子重明親王の日記『吏部王記』には、天慶8年（945）8月2日条に「其の輿、桧皮三を葺く。其の一、鳥居の額有り。題して云はく、自在天神と。即ち故右大臣菅公の靈なり。其の二、輿と。一に云はく、宇佐春王の三子と。一に云はく、住吉神と云々⁽⁵⁾」とあり、摂津国河辺郡に至った神輿の様子を伝えている。本記事から、「志多羅神上洛事件」における神輿は、輿の上に小型の社を乗せ、桧皮で屋根を敷いており、鳥居と額が施されていたことが理解できる。また、鳥羽上皇の命により藤原通憲が編纂した『本朝世紀』天慶8年7月28日条に「今月廿五日辰刻從河辺郡方数百許人荷担三輿、捧幣擊鼓、哥舞羅列、來着当郡、道俗男女、貴賤老少、從彼日朝至于明暁、会集成市、哥舞動山⁽⁶⁾」とあり、志多羅神の3基の神輿を数百人が担ぎ、捧げ物の幣をもち、鼓を鳴らし、歌い舞いながら河辺郡から豊嶋郡に到着したとする。市をなすほどの人々が集まり、歌舞の音は山を動かすほどであったと記されている。

この熱狂的神輿渡御の様相が、現在の例大祭に通じる精神性があることに異論はないだろう。では、歴史研究上において本事件はどのように捉えられてきたのだろうか。論点となるのは、以下の3点である。

- (1) 第一神輿の「自在天神」が菅原道真の靈であるという点
- (2) 京都への上洛をめざしていた点
- (3) 志多羅神は石清水八幡宮で収斂されたという点

河音能平氏・飯沼賢司氏の研究を要約し、上記の3点について述べていこう⁽⁷⁾。

河音能平氏によると、「志多羅神上洛事件」は民衆的宗教運動であり、菅原道真の御靈を北九州から都に村送りすることで、藤原時平・醍醐天皇によって発布された延喜莊園整理令に象徴される律令制再建政策への民衆の強い反政治的感情を宗教的形態において表現したものであったとされる。この民衆的宗教運動とされる「志多羅神上洛事件」

においては、北九州から山城山崎まで、多くの民衆によって共感的に迎えられ、大きな民衆的世論を形成していく。

上洛に際しては、民衆たちは「月笠著留。八幡種蒔久。伊佐我等は荒田開无。志多良打天止神は宣末不。打我等加命千歳志多良米。早河は酒盛波。其酒富る始女曾。志多良打は牛和支支奴。鞍打敷介佐米負せ无⁽⁸⁾」という「童謡（わざうた）」を村から村へと歌い継いでおり、農業生産の先頭にたっていた富豪層が自分たちの生産意欲と自信をたたえ、古代律令制支配への反意を示しているものであった。

注目されるのは、「道俗男女貴賤老少」「郷々上下貴賤」の区別なく多くの民衆たちが参加したいという点である⁽⁹⁾。河音氏によると、本事件がこの後に展開する村落共同体の起点として独自な歴史的位置を持つものであったこと、志多羅神の童謡が現代にまで伝承されるほど、身分の区別なく全国に広がりをみせていたことを、黒田日出男氏の研究⁽¹⁰⁾を引きながら明らかにしている。つまり、河音氏は律令体制下における農業共同体の解体を富豪層のみならず、一般農民層によって、精神的に自立し克服したことを明らかにしたのである。

飯沼氏は、天平勝宝元年（749）に宇佐八幡神が奈良の東大寺に入った際の紫の輿を「神輿」とみなす見解を批判的に考察し、輿に乗っていたのは八幡神の託宣を司る役職であった禰宜（シャーマン）であったとした。宇佐八幡宮において生み出されたとされる「神輿」が、志多羅神の移動とともに民衆と深いかかわりのある菅原天神を吸収し、石清水八幡宮に入ることで反権力的な御靈の信仰を八幡神のなかに取り込むことになったと考察している。天皇靈としての応神八幡は民衆の御靈信仰を取り込み、新しい御靈的八幡へと展開したのである。

以上の先行研究から鑑みて、「志多羅神上洛事件」は今日の祭礼神輿に直接的につながる位置づけをもつものであると考えられよう。もちろん、例大祭における「神輿合わせ」の熱狂も、反権力的な御靈信仰が取り込まれた八幡信仰のなかに存在すると言える。

2 18・19世紀における例大祭の状況と播磨国的情勢

宝暦8年（1758）「規式定」によって、当時の状況を考察したい⁽¹¹⁾。第7条と第12条に以下の記事がある。

【史料ア】「規式定」第7条

一、於御宿殿神輿あらく昇上申候ニ付、神輿并御宿殿相損候、此儀、急度停止可申付事、別而、御宿殿ニテ神輿練り申儀、弥以堅為仕申間鋪候、若相背於御宿殿ニ神輿練り上、神輿并御宿殿相損申候ハヽ、其練り番之村より急度修覆可仕事

附 此儀先年書合有之候処、近年無法ニなり候、向後右書合出之通相守可申事

【史料イ】「規式定」第12条

一、御幸之節、如旧例当年々神輿之御先ニおいて、管弦有之候、依之三輿共押掛け、あらく仕不申様ニ急度副當、隨分神妙為仕可申候

附 練物之類、右ニ相准ジ神妙可仕候、尤村々々警固多指出可申事

史料アより、御旅所御宿殿において神輿を荒く担ぎ上げることで、神輿ならびに御宿殿が損傷していることが述べられている。御宿殿においては神輿の練り上げを禁止している条目と理解できよう。もし練り上げによって神輿あるいは御宿殿が損傷した場合には、練番の村が修繕することを記している。「先年書合有之候処、近年無法ニなり候」より、すでに内規があったにも関わらず、近年は守られていない点に言及した条目である。

史料イは、宝暦8年（1758）より、神幸渡御行列の順番として、神輿の前に管弦を奏すことが決められ、神輿を荒く担がないように通達した条目である。神輿を荒く練り上げないように注意を行っている。また、各村から多くの警固役を差し出すように記されている。

以上から、18世紀半ばには神輿を練り上げるなどの所作が行われており、七か村によって書面での規制が行われていたのである。では、具体的な練り上げの様相を嘉永4年（1851）製作の松原八幡神社祭礼絵馬（以下、「祭礼絵馬」と表記⁽¹²⁾）によって検討していきたい。



図1 祭礼絵馬「神輿三の丸」

左図は祭礼絵馬御旅山への渡御を描いた「神輿三の丸」である。練り子たちが腕を真っすぐ高く伸ばし、神輿を練り上げている様子が理解できよう。声が聞こえてきそうな躍動感と熱狂的な練り子の様子がよくわかる。現在の例大祭で使用されている神輿を支える竹棒「ケンゴー」は描かれていないため、19世紀半ばでは制度化された神輿の練り合わせは行われていないものと推察できる⁽¹³⁾。しかしながら、18・19世紀における熱狂的な渡御の様相は志多羅神の上洛のごとく、神輿や御宿殿を損傷させるほどの練り上げが御旅所にて行われていたのであり、社会状況に影響をうけた精神的一体性が存在したものと推察できる⁽¹⁴⁾。

では、18・19世紀の当該地域の社会情勢はどのようなようであったのだろう。ここでは、宝暦8年（1758）「規式定」成立前の社会情勢を『姫路市史』によって概観してみよう⁽¹⁵⁾。

寛保元年（1741）11月、幕府は白河藩主松平明矩に姫路藩転封を命じた。これは財政立て直しに好都合な豊かな領地姫路において、松平氏の救済的意味合いが強かったという。ところが、寛保3年（1743）以降、寛延元年（1748）に至る6年間に大きな台風が4度到来し、松平姫路藩は年貢の減収を余儀なくされ、藩財政は悪化していく。特に被害が大きかったのは延享元年（1744）と寛延元年（1748）であった。

延享元年（1744）の台風による被害は52000石余りの損毛、潰家53軒などの被害があり、特に海岸部の塩田・製塩業の被害が大きく、藩の減収は21000石以上であったとされる。この事態に際して藩は年貢の減免措置をとり、年貢納入時期の延期や粗悪米による収納も認めた。被害の大きい百姓には扶持米の支給も行われている。

延享5年（1748）将軍代替わりの祝賀として派遣された朝鮮通信使の接待が幕府から命じられる。財政的に通信使への接待費用がまかなえない姫路藩は、その費用の捻出に家臣と領民から御用金上納を命じる。領民からは町方10000両・灘方4組5000両・22組の村方5000両の御用金を徴収した。この御用金は大庄屋・庄屋の判断で割付が行わ

れたが、こうした藩当局の対応に民衆たちの不満が募るのは想像に難くない。

さらに、寛延元年（1748）の台風による被害は37000石の風損汐痛み、潰家366軒などであった。稻の損毛自体は延享元年よりも低かったようであるが、この年は旱魃により稻の実りそのものがよくなかったとされる。そのため百姓からは年貢の減免措置の願いが繰り返し出されたが、財政難の藩当局が年貢の減免要求に応じることはなかった。

同年11月、藩主明矩が急逝し、藩政混乱のなか葬儀が終了した12月21日、市川河原に福居組・中筋組・的形組の百姓たちをはじめ多数の民衆が集結し、年貢の延納を求めて姫路城下に押し寄せようとする。姫路藩寛延一揆の勃発である。西条組大庄屋宅・飯田組3か村庄屋宅・前之庄組大庄屋宅の打ち潰しを経て、翌年2月1日には例大祭氏子地域である木場・宇佐崎、2月2日には松原・妻鹿にも一揆は広がりを見せている。打ち潰しの対象は大庄屋、大庄屋に準ずる役割を担う庄屋、藩の財政方の役職をつとめていた豪商などであり、藩の経済政策に対する抗議行動であったと捉えられる。旱魃と台風の影響、朝鮮通信使による御用金の徴収、年貢減免要求への拒否などの施策が民衆たちに受け入れられることはなく、百姓の不満は一気に高まったのである。

以上から、神輿の練り上げが行われ、「規式定」によって村相互の遵守事項が定められた時期は社会的不安やストレスが増大していた時期であったことが明らかとなった。このような社会不安高揚の時期に神輿を練り上げる所作が繰り返されるということは当時の民衆たちが社会不安やストレスを解消していくこうとする精神性、反権力的な御靈信仰が取り込まれた八幡信仰と合一した社会変革のエネルギーを感じ取れはしないだろうか⁽¹⁶⁾。

3 単元の内容選択原理と構想

（1）授業の内容選択原理からみた教材の有効性

例大祭、所謂「灘のけんか祭り」を取り上げる意義として以下の2点を指摘できよう。

第1は、例大祭の原初形態である放生会が殺生禁断思想と結びつき、社会の危機や不安に際して、神仏の力で鎮めようとしていた中世の思想や考えに向き合わせることで、現在のコロナ禍の状況との比較・検討ができるという点である。ピーター・セイシャスらの諸論を紹介した星瑞希らは、歴史的思考を用いて過去の文脈を読み解きつつ、過度な現在主義を避ける授業構成が学習者に歴史授業に意味を感じさせるものになることを

指摘する。そして、過去の文脈と現代社会を関連付ける概念「継続と変化」を組み入れることにより、過去から今にかけて何が変化し、何が継続しているかを考える役割を果たし、現代探究概念としての「歴史的意義」（歴史的事象の今日的な意義を考えること）、「歴史の倫理的側面」（過去を現在における倫理に照らし合わせてどのように判断するかを考えること）が現代社会における歴史論争問題に取り組む上で有益な示唆を与えると主張している⁽¹⁷⁾。現代社会にも通じる問題であるかどうかについて問い合わせさせることができれば、学ぶ意味を高めて問題解決にかかわる認識と判断が可能となるであろう⁽¹⁸⁾。

第2に、神靈の乗り物とされる輿である「神輿」をぶつけ合うことの理由を問うことで、差別を正当化する歴史的観念「タタリ」「ケガレ」に対する批判的視点を鍛えることができ、「忌避」や「怖れ」や「不安」、「憎悪」という身分差別のスイッチを働かせることなく、地域の伝統を受け継ぎ、発展させていく強い願いが込められていることを感得できるという点である。

現在も、祭りの準備は何カ月も前から始められる。屋台の蔵開きを楽しみにしている児童にとって、地域住民の祭りの準備や「ヨーイヤサー、ヨッソエ」というかけ声、太鼓の音に、祭りの伝統の重さを感じずにはおれない。身分や属性に関係なく、地域社会で祭りを育んできた歴史を肌で感じている児童は「志多羅神」の事件を共感をもって受け入れ、「タタリ」や「ケガレ」を乗り越える歴史的な見方・考え方を手に入れることができるであろう。

（2）歴史的事象の具体を通した単元の実際

①単元名 「灘のけんか祭りの成立と展開」

②単元目標

○知識・技能

- ・松原八幡神社秋季例大祭のはじまりが放生会であったことをもとにして、放生会の行われた背景やその歴史的意義、当時の人々の思考方法を理解する。

○思考・判断・表現

- ・神輿がどのように生まれたのかを志多羅神上洛事件によって考察し、民衆たちの神輿に託した願いや祈りを考え表現する。

○主体的に学習に取り組む態度

- ・姫路藩寛延一揆と荒い神輿担ぎの関係性から、神輿合わせへの民衆たちのエネルギーを歴史的に考えようとしている。
- ・松山善三さんの言葉を、神輿と自分、歴史と伝統の視点によって、考えようとしている。

③指導計画

段階	時	教師の働きかけ	予想される反応	資料
1	1	<p>◇松原八幡神社秋季例大祭はいつ、どのようにしてはじまったのだろう。</p> <p>○予想してみよう。</p> <p>○屋台の写真から説明してみよう。</p> <p>◇神社の縁起から調べてみよう。</p> <p>◇実際にその時代の資料に出てくるのはいつだろう。</p> <p>○石清水八幡宮との関係を説明する。</p> <p>◇では、どのようにして祭りは始まったのだろう。</p> <p>○この用水の名前にヒントがあるよ。</p> <p>○放生川の意味を予想してみよう。</p>	<p>☆いわゆる「灘のけんか祭り」のビデオの提示</p> <ul style="list-style-type: none"> ・江戸時代かな ・室町時代かな ・平安時代かな <p>☆各地区の屋台の写真を提示</p> <ul style="list-style-type: none"> ・戦国時代だ ・戦国の武将が描かれている ・戦国時代があって神輿のぶつけ合いがはじまった <p>☆「播州松原山八幡宮縁起」の現代語訳の提示</p> <ul style="list-style-type: none"> ・763年っていつ？ ・奈良時代だ ・古いなあ <p>☆「石清水八幡宮文書」の提示</p> <ul style="list-style-type: none"> ・文永3年、1266年 ・鎌倉時代のころだね <p>☆松原川（放生川）の提示（ペアワーク）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・いつも通るところ、用水路だ ・松原川っていうんだ ・放生川ってどういう意味だろう（グループワーク） ・何かを生かす川 ・生きていることの意味 ・魚を逃がす川だ 	ビデオ 屋台写真 播州松原山八幡宮縁起 検校善法寺宮清下文（石清水八幡宮文書） GoogleMap 松原川

段階	時	教師の働きかけ	予想される反応	資料
1	1	<p>◇松原八幡神社の本所と呼ばれた石清水八幡神社という神社の「石清水祭」という祭りをみてみよう。</p> <p>○鎌倉時代の松原八幡神社の祭りを考える。</p>	<p>☆放生会のビデオ視聴</p> <ul style="list-style-type: none"> ・何かを逃がしている ・きっと魚だ ・放生会は生き物を逃がしている祭りだ <p>(個人のまとめ)</p> <p>(意見交換)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・松原八幡神社もかつては放生の儀式を行っていたんだ ・感染症や天災をみんなの心をひとつにして乗り越えようとしてるんだ ・いつからけんか祭りになったのだろう 	石清水祭のビデオ

段階	時	教師の働きかけ	予想される反応	資料
2	2	<p>◇「武士のはじまり」の時代、人々は社会の危機にどのように対処したのでしょうか。</p> <p>○予想してみよう。</p> <p>◇放生会がどんなときに行われているか調べてみよう。</p> <p>◇なぜ、殺生禁断令や放生会が天災や「元寇」のときに多く出されているのだろう。</p> <p>◇みこしと天災の関係について資料から考えてみよう</p>	<p>☆前時を振り返り、石清水祭のビデオを再提示する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・放生会をすることで安心をしようとした ・生き物を大切にしようとした ・仏教の教えを大切にした <p>☆年代ごとの殺生禁断令・放生会の件数、天災や「元寇」との関連性を提示</p> <p>(ペアワーク)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・飢饉のときに放生会が多い ・天災のときだ ・「元寇」のときに放生会が多く行われている ・社会の不安を仏教の力でおさめようとした ・社会の危機を神仏の力をかりて、民衆を納得させようとした ・その時代はそういう考え方だった <p>☆みこし損傷が感染症や天災、穢によつて起きたとする資料提示</p> <p>(グループワーク)</p>	<p>ビデオ</p> <p>殺生禁断令放生会の件数 (出典：峰岸純夫「日本中世の身分制研究をめぐって」)</p> <p>宮寺縁事抄放生会4 治承4年(1180)</p>

段階	時	教師の働きかけ	予想される反応	資料
2	2	◇本時のまとめをしましょう	<ul style="list-style-type: none"> ・みこしの鳳凰が損傷していることが社会でよくないことが起きていると考えられている ・みこしの損傷がケガレによって起きていると考えられている ・みこしはとても大切なものなんだとと思う <p>(個人のまとめ) (意見交換)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・社会の危機に際して、神仏の力でおさめようとしていた ・みこしはまつりのシンボルで、みこしが壊れると祭りができなかつた ・みこしが損傷すると、社会によくないことが起きていると考えられた ・みこしは大切にされていた ・みこしについて調べてみたいな 	勘仲記 正応3年 (1290)

段階	時	教師の働きかけ	予想される反応	資料
3	3	<p>◇神輿は、いつ、どのように、できたのだろう</p> <p>○予想してみよう。</p> <p>◇資料をみて話し合おう。</p> <p>◇資料からみこしを担ぐ様子を想像してみよう</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・平安時代 ・鎌倉時代 ・江戸時代 ・近代になってからかな <p>☆志多羅神上洛事件における神輿の形を表した現代語訳の提示</p> <ul style="list-style-type: none"> ・小型の社（やしろ）をのせている ・鳥居と額があるみこしだ ・天神さん（菅原道真）を神さまとしている ・945年にはみこしがあったんだ ・平安時代にはみこしができていた <p>☆志多羅神の3基の神輿を数百人が担ぐ様子の現代語訳を提示（ペアワーク）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・数百人もあるつまっている ・太鼓を鳴らしている ・歌い舞いながらみこしを運んでいる 	吏部王記 天慶8年8月 2日 (945) 本朝世紀 天慶8年7月 28日 (945)

段階	時	教師の働きかけ	予想される反応	資料
3	3	<p>◇資料からみこしへの民衆たちの願いを考えよう</p> <p>◇みこしの発祥時の人々の願いから、本時のまとめをしよう</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・市ができるほど賑やかだった ・山がうごくほど歓声がすごい ・灘まつりと似ている ・身分の区別がない ・自分たちで田畠を開墾していこうという強い意志がある <p>☆河音氏の研究をやさしく解説した文章を提示 (グループワーク)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・当時の政策への批判的意味合いが強かったんだ ・民衆たちの運動だった ・莊園整理令への批判だった ・自分たちで開墾していくことをうたいあげている <p>(個人のまとめ) (意見交換)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・みこしにはいろんな願いがある ・数百人もの人々があつまることはすごい運動だった ・政治への不満がみこしになったんだ ・八幡神は天神さんと同じように民衆たちの神だった 	河音能平 『中世村落社会の首都と農村』 (東京大学出版会、1984年) 第1章

段階	時	教師の働きかけ	予想される反応	資料
4	4	<p>◇なぜ、みこしをぶつけあうようになったのだろう</p> <p>○予想してみよう。</p> <p>◇宝暦8年（1758）の「規式定」をみて話し合おう。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・みこしをぶつけると神さまが喜ぶから ・ぶつけあうことで軍船のカキを落とすという意味があるから ・願いがかなうとされているから <p>☆宝暦8年「八幡宮御神事御規式定」の現代語訳の提示 (ペアワーク)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・御旅所でけんかが起こっている ・順番を競っている ・宝暦8年（1758）ごろにけんかが始まった ・荒いみこし担ぎが起こっている 	八幡宮御神事御規式定

段階	時	教師の働きかけ	予想される反応	資料
4	4	◇嘉永4年（1851）の 絵馬をみて話し合おう	☆嘉永4年（1851）の「奉納絵馬」の 提示 (ペアワーク) ・絵馬では神輿を担ぎ上げている ・嘉永4年（1851）には練り上げてる ね ・けんかはありそう ・ぶつけあいはないのでは ・いや、ぶつけあっている ・「ケンゴー」がないので、ぶつけあい はおこなっていない ・「シデ」もないよ	奉納絵馬
		◇明治45年（1912）「風 俗調査」の資料をみ て話し合おう	☆明治45年（1912）「風俗調査」の資料、 当時の写真を提示 ・「ケンゴー」「シデ」がある ・ぶつけあいをしている ・みこしがたおれている ・この時期にはぶつけあいがあったんだ	風俗調査 灘まつり (神戸新聞出版)
		◇当時の社会はどんな 状況だったのでしょ う	☆甚兵衛一揆物語を提示 (グループワーク) ・台風や水害が毎年のように起こっている ・百姓は年貢を納めないといけないの で大変だ ・打ち潰しがおきている ・一揆がおきている	甚兵衛一揆物 語（夢前町） 台風到来の年 表 寛延一揆の地 図
		◇民衆の熱いエネル ギーとみこしをぶつ け合う行為について 考えよう	・社会への不満や政治への不満が大き な原因だった ・民衆のエネルギーがみこしをぶつけ あうことにつながったのかな ・熱量がすごいので、まとまりもすごい と思う	
		◇今も社会を動かし、 地域の連帯が神輿に 表現されているね。 みなさんは灘まつり にどんな思いをたく しますか。	☆映画監督松山善三さんが灘まつりを 評した文章の提示 (個人のまとめ) (意見交換) ・ぶつかりあうのは心と心だ ・みこしはぼくたちの祖先だ ・自分が歴史の中に生きている ・美しい魂のぶつかりあいだ	映画監督 松 山善三さんの 言葉

(3) 学習の流れと実際

本授業の対象は中学生であるが、小学生年代の授業として、第1時と第4時の内容を、妻鹿小学校5・6年生を対象として授業を行った。以下、第1時の授業記録（抜粋）である。

教師：妻鹿の祭りのすごいところを教えてくれる？

児童：かっこいい。

児童：どうつき。

児童：シデ。

児童：獅子。

児童：かけ声が大きい。

児童：だんじり。

児童：装飾。

教師：妻鹿祭りのすごいことのこと、「核心」っていいます。その核心を捉えた名文を読みますから、よく聞いてね。

「ぼくは、そのあふれる活気、怒声、歓声におどろき感動した。ぶつかり合うのは、肉体ではなく、心と心である。ひきまわされるみこしは、ぼくたちの祖先であり、そのなかにいる時、ぼくたちははっきりと、自分が歴史のなかに生きていることを知る。このまつりはそこに生き、そこに帰る若者たちのものである。美しい魂の、おののきである」

うーん、難しいよね。何かでも、何かすごいよね。この意味、どんな意味だと思う？

児童：一人一人の魂を表している。

児童：肉体ではなく、心と心っていうのは、ただ何も考えずに、ぶつかるのではなく、意地と意地がぶつかり合うということだと思った。

教師：ただ、ぶつかるんじゃなくて、意地と意地。すごくいいところに気づいたね。

児童：ぶつかり合うのは、肉体ではなく、情熱。

児童：屋台を担ぐ人がそれぞれ思っている思いが心で、その思っている思いが、思いを乗せた屋台がぶつかってるから、心と心がぶつかってるんだと思う。

教師：ああ、思いを乗せているから、心と心がぶつかっているんだ。いいこと言うね。すごい。

さすが。妻鹿小学校の子どもたちは賢い。特に今日は、この、歴史に関係あるっていうのが、みんなすごく分かったと思うんだけど、心とか、それから魂があるとか、それから、歴史があるとか、こういうのが今日のキーワード。勉強の大切な言葉になりますね。

じゃあ、みんながいつも行っている、この松原八幡神社、いつ頃できたと思う？貴族の時代、武士の始まりの頃、有名な江戸時代、明治時代。どうかな？

松原八幡神社には、古い資料が残っています。由緒書っていいます。その由緒書には、天平宝字7年にできましたよって書いてあります、天平宝字っていつだろ。西暦でいうと763年だって。調べていくと、文永3年のお手紙があったんです。石清水八幡神社っていうところから、松原八幡神社にお手紙を出してるんです。いつかというと、1266年、武士の時代ですよね。この時にお手紙を出してる。さらに調べていくと、この妻鹿の辺りに、あるいは白浜の辺りに、人が住み始めたのは、覚えやすいから、覚えておいてね。1000年です。長保2年といいます。

(中略)

児童(全員)：「妻鹿まつりはどのようにはじまったのだろう」。

教師：これが今からの課題です。謎を解くヒントはここにあります。ここはどこでしょうか。この赤い丸のところです。ここに祭りが始まる、謎を解くヒントがある。何だと思う？隣の人と相談しよう。

児童：松原八幡宮神社へ行く時に、何かでっかい木造の看板みたいなところがあるところ。

児童：松原公民館。

児童：鉄のふた。

教師：正解。この鉄のふたのところに謎を解くヒントがある。はい。もう一回、隣の人と、10秒間だけ、話し合おう。

児童：あの中に古井戸があった。

児童：水だ。

児童：清めるための水がある。

教師：ああ、なるほど。水がすごく近いです。

児童：川？

教師：そう川だね。今は用水路なんだけど。この道の下に、川が流れてたんです。謎を解く

ヒントがこの川の名前。

多数の児童：放生。

教師：放生？ そうです。放生川っていいます。放生川というのは、放生会という行事で魚を逃がしてやる川のことをいうんです。その放生会という行事のビデオを見てみます。

(ビデオを見ながら)

児童：みこし。

児童：魚。

児童：何か白い人が担いでる。

児童：一の丸、二の丸、三の丸。

児童：山行くんちゃうん。

教師：男山という山なんだよ。山から下りてきたんだよ。

児童：魚逃がした。

児童：ウナギ。

児童：お絆。

児童：子どもも参加してた。

教師：似てるね。そして、石清水祭の中にある放生川。そして、妻鹿祭りにも、放生川がありました。妻鹿祭りは、どのようにして始まったと思いますか。はい。じゃあ隣の人と考えてね。

(中略)

児童：もともとは放生会だったけど、だんだんと今みたいに担いで、それがだんだん豪華になつた。

教師：妻鹿祭りは、古くは放生会というお祭りだったのです。放生会っていうお祭りは、魚を逃がしてやるのです。こんなふうに、生き物を逃がしてやる儀式なんだけど、今までいうインフルエンザとか、そういう病気が、昔もすごいはやってたの。どうにかして、病気からみんなを守りたかったんだね。そのために、生き物の命を守つたら、そういう感染症がなくなるんじゃないかなって、当時の人は考えたんだよ。地震や水害とか、そういう人々を守るために、放生会っていうお祭りが行われてたんですね。

妻鹿祭りも、もともとは、この放生会というお祭りだったというふうにいわれています。1時間目、これで終わります。

(4) 授業資料スライド第1時



妻鹿まつりの良さを教えてください



妻鹿まつりの核心をとらえた名文
映画監督 松山善三さん

核心とは
中心となる大切なところ



ぼくは、そのあふれる活気、怒声（どせい）、歓声（かんせい）におどろき感動した。ぶつかり合うのは、肉体ではなく、心と心である。



ひきまわされるみこしは、ぼくたちの祖先（そせん）であり、
そのなかにいるとき、ぼくたちははっきりと自分が歴史のなかに生きていることを知る。



このまつりはそこに生き、そこに帰る若者たちのものである。
美しい魂（たましい）のおののきである。

妻鹿小学校の子どもたちはかしこい

みこしはぼくたちの祖先
(そせん) だ



妻鹿まつりの歴史について学ぼう



妻鹿小学校の子どもたちはすばらしい

4

松原八幡神社は、いつ、できたのでしょうか？



松原八幡神社が
できたのは？

てんびょうほうじ
天平宝字7年
(763年)
と伝わっています！



妻鹿小学校の子どもたちは仲良しだ

松原神社文書 卷之二

松原國松原八幡神社當御神體之張自石清水源而之山供奉入饋
抑當社之御靈應者、
仁王四十七代之御曾孫帝天王之御宇 天平寶字七年 39歳
海邊之白濱然每夜海中。有大光明之靈燄其時又國司仁有夢夢之皆然則彼光明
之在所被尋之處方一尺之紫檀之靈木。仁有虫食之文。宇佐第二之御神八幡大
菩薩ト云々。則白濱ヒ一夜之間數千本之松出生セ。國司則靈瑞靈夢之旨被經
奏聞之處以當國之御公物被起立神廟。從上一人至下萬民參敬越社。然則利
生威宣而神威甚新長其被白濱人星繁昌。田裏之開發シヨリ以來當社里

松原神社文書 卷之三

仁王四十七代之御曾孫帝天王之御宇 天平寶字七年 39歳
海邊之白濱然每夜海中。有大光明之靈燄其時又國司仁有夢夢之皆然則彼光明
之在所被尋之處方一尺之紫檀之靈木。仁有虫食之文。宇佐第二之御神八幡大
菩薩ト云々。則白濱ヒ一夜之間數千本之松出生セ。國司則靈瑞靈夢之旨被經
奏聞之處以當國之御公物被起立神廟。從上一人至下萬民參敬越社。然則利
生威宣而神威甚新長其被白濱人星繁昌。田裏之開發シヨリ以來當社里

松原神社文書 卷之四

仁王四十七代之御曾孫帝天王之御宇 天平寶字七年 39歳
海邊之白濱然每夜海中。有大光明之靈燄其時又國司仁有夢夢之皆然則彼光明
之在所被尋之處方一尺之紫檀之靈木。仁有虫食之文。宇佐第二之御神八幡大
菩薩ト云々。則白濱ヒ一夜之間數千本之松出生セ。國司則靈瑞靈夢之旨被經
奏聞之處以當國之御公物被起立神廟。從上一人至下萬民參敬越社。然則利
生威宣而神威甚新長其被白濱人星繁昌。田裏之開發シヨリ以来當社里

代之為御神。領二年之中。廿四ヶ度之節令。執行三所權現之日御供佛之毎日
之謹廣。諸堂之佛供。爲燈油薪紙。國家之油鹽薪紙。其外。從伏見院。勝野郡。里之於關
中所。又。田畠等之御寄送。在之。署又。石清水之八幡宮。著貞觀年中之。勅請。之御聘。云
々。據。本記。當社大苦願。著百二十余年。已前之。爲御靈應。自其已來。至。於家之御代。
當國々。守代々。或修造。御神體。或者。拜。勝。島。忌。等。祓。再。興。祀。必。守。達。之。御一代。
修理。恭營。之。典行。在。之。其。外。又。御。六。拾。六。名。之。爲。諸。給。人。被。執。行。御。故。生。大。會。之。御
廟。勤。神。馬。神。我。又。當。社。之。商。人。等。當。社。之。印。符。給。娶。國。中。之。往。來。之。無。共。類。愛。諸。公
事。之。勇。除。雖然。木。世。之。爲。林。伐。錯。亂。之。弊。諸。草。家。代。々。曾。祖。等。之。御。制。礼。當。周。品。形
三代。之。御。行。并。守。謹。代。待。所。顯。代。之。一。行。在。之。被。成。御。物。見。如。先。祖。無。相。違。舊。考。

十月 日

水。癸。等。

湯原殿

泰文

社 保 論 (全) 岩寺芳信 櫻井忠宣 (乙)

松原八幡神社は、いつ、できたのでしょうか

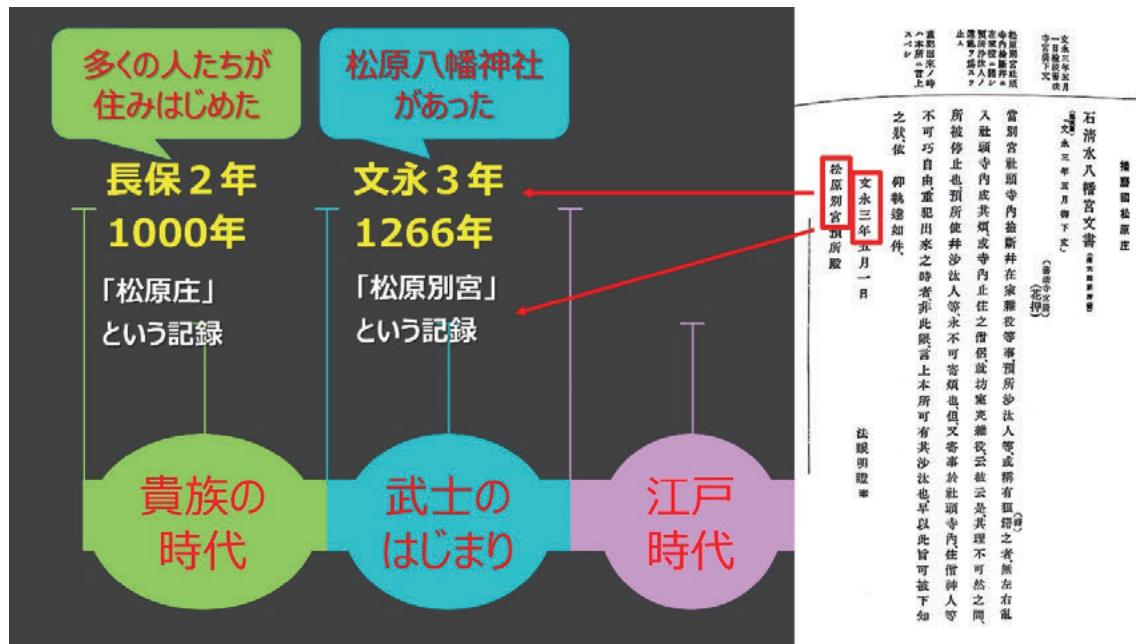


松原八幡神社ができるのは？

てんぴょうほうじ
天平宝字 7年
(763年)



妻鹿小学校の子どもたちは仲良しだ



妻鹿まつりの様子



妻鹿まつりはどのように
はじまったのだろう



妻鹿小学校の子どもたちはとても明るい

10

なぞを解くヒントは
ココにある！



放生(ほうじょう)川とよばれていた川が流れていた！



**放生川
(ほうじょうがわ) とは**
放生会 (ほうじょうえ) という
行事で魚を放してやる川



妻鹿小学校の子どもたちはよく考える



13

**放生会 (石清水祭)
石清水八幡宮**



妻鹿小学校の子どもたちは最高です

14

妻鹿まつりはどのようにして はじまったのでしょうか？



妻鹿まつりは、古くは「放生会（ほうじょうえ）」
というお祭りでした

すべての生き物の生命を守り、殺生をいましめ、感染症（インフルエンザなど）や地震や水害から人々を守るお祭りでした

(5) 授業資料スライド第4時



ぶつかり合うのは、肉体ではなく、心と心である



なぜ、みこしをぶつけあうのでしょうか

ぶつかり合うのは、肉体ではなく、心と心である。



なぜ、みこしをぶつけあうようになったのだろう？



妻鹿小学校の子どもたちはすばらしい

3

ぶつけあうようになった時期を考えよう

宝暦8年
1758年

祭りに参加する村々の決め事

1 御神事
御規式定

嘉永4年
1851年

御旅山に向かう行列の絵

2 奉納
絵馬

1

1

ぶつけあうようになった時期を考えよう

**宝暦8年
1758年**

祭りに参加する村々の決め事

1 御神事
御規式定

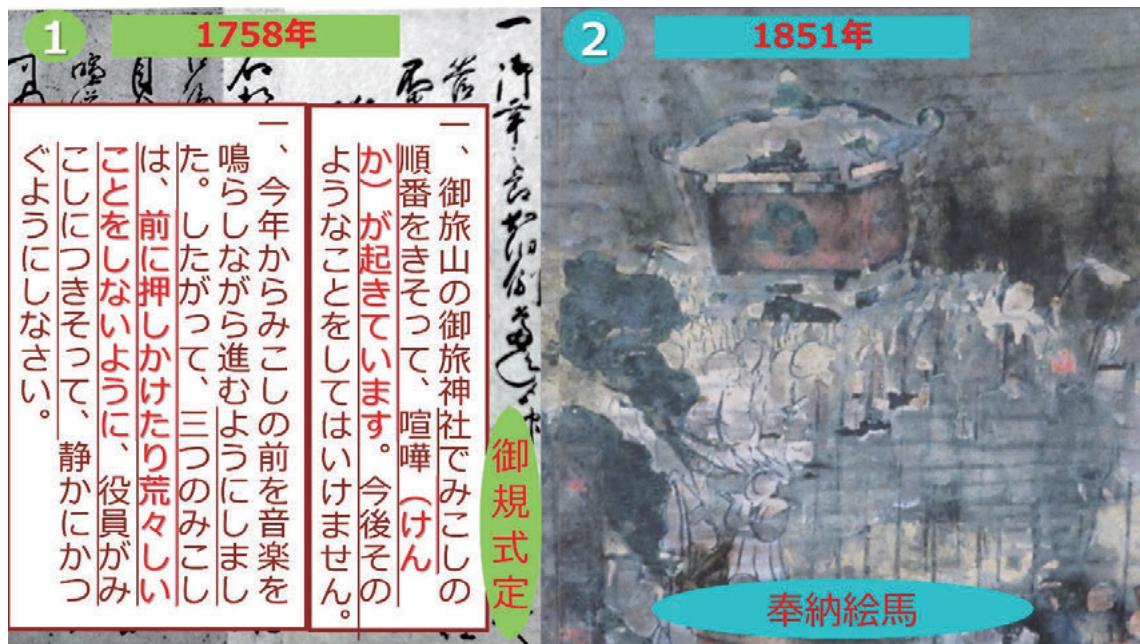
けんかや
荒々(あら
あら)しい
かつぎ方
はあったの
かな?

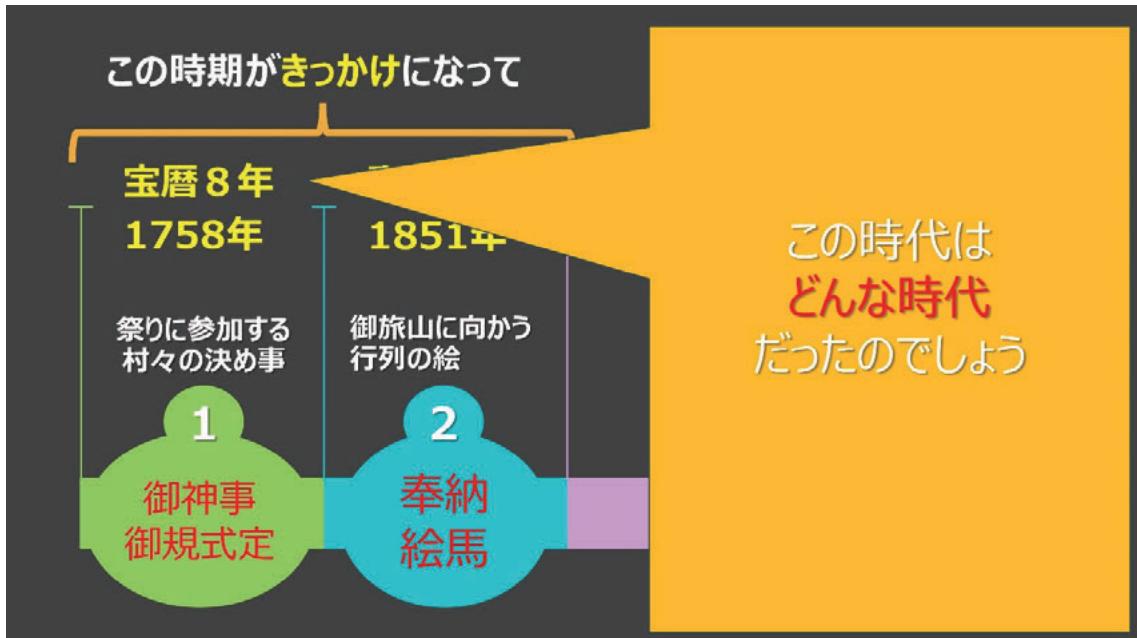
1 一、今年からみこしの前を音楽
を鳴らしながら進むようにしました。
したがつて、三つのみこしは、前に押しかけたり、
荒々しいことをしないように、
役員がみこしにつきそつて、
静かにかつぐようにします。

2 それから100年後みこしのかつぎ方はどうでしょうか

けんかや
荒々しい
かつぎ方
はあったの
かな?

「奉納絵馬」
嘉永4年
(1851)





このころはどんな時代だったのでしょうか

台風や洪水によって大きな被害（ひがい）があった

寛保3年(1743)・延享元年(1744)・延享3年(1746)・寛延元年(1748)



姫路藩の各所で百姓一揆が起こる

このことか
うか

台風や決) があった

寛保3年(1743)・延寛延元年(1748)



姫路藩の各所で百姓一揆が起こる

ぶつかり合うのは、肉体ではなく、心と心である。

なぜ、みこしをぶつけあうように なったのだろう？

妻鹿小学校の子どもたちはすばらしい

13

制限時間・解答用紙・採点基準
あなたのこれから的人生

最後の問い合わせ「松山さんの
言葉の意味を考えなさい」



ぼくは、そのあふれる活気、怒声（どせい）、歓声（かんせい）におどろき感動した。ぶつかり合うのは、肉体ではなく、心と心である。



ひきまわされるみこしは、ぼくたちの祖先（そせん）であり、
そのなかにいるとき、ぼくたちははつきりと自分が歴史のなかに生きていることを知る。



このまつりはそこに生き、そこに帰る若者たちのものである。
美しい魂（たましい）のおののきである。

妻鹿小学校の子どもたちは最高だ！

おわりに

平将門の乱の顛末を描いた「將門記」に、將門に「新皇」の位を授けた著名な記述がある。以下の記事である⁽¹⁹⁾。

于時有一昌妓云者、攢八幡大菩薩使、奉授朕位於蔭子平將門、其位記左大臣正二位菅原朝臣靈魂表者、右八幡大菩薩起八萬軍奉授朕位

これは下総北部を地盤としていた平将門が、天慶2年（939）に関東の大半を制圧して、弟や従兵を国司に任命し、みずから新皇と称して関東の自立をはかる一節である。注目されるのは八幡大菩薩が皇位を将門に授け、大宰府で病死した菅原道真の靈魂が位記（証書）を書いている点である。つまり、八幡大菩薩と菅原道真の靈魂は王権に反逆して東国に新しい王権を樹立しようとする者を正当化する役割を演じているのである。

第1節で述べてきたように、「志多羅神上洛事件」においても菅原道真への御靈信仰のもと、八幡大菩薩は石清水へ赴く託宣を下し、菅原道真の靈魂と行動をともにする。これは延喜莊園整理令に象徴される律令制再建政策への民衆の強い反政治的感情を宗教的形態となつたものであった。つまり、ここでも王権に対する反逆的立場をとっている。

一方、八幡神は八幡大菩薩であり、応神天皇の靈であるとされる。中野蟠能氏は8世紀初頭に応神天皇の靈と合体した八幡神が成立したとしており⁽²⁰⁾、飯沼賢司氏は弘仁12年（821）から承和11年（844）の間に八幡神が応神天皇と認識されるに至ったとしている⁽²¹⁾。八幡神の由来は謎に包まれている点が多いが、貞觀元年（859）に石清水八幡宮として勧請されるまでに、朝鮮出兵の神話と結びついた応神天皇など三神を祭神として、武勲のある天皇家の祖神という性格をもって、歴史的に王権の守護神となっていく。

このように八幡神は歴史的に相反する2つの性格「王権を守護する神」「王権に反逆する神」を有する。こうした二面性は現代の八幡信仰のなかにも息づいている。そして、例大祭における神輿のぶつけ合いにも、この二面性が影響を与えていていると考えられる。

前者においては、「松原八幡宮略記」によると、「抑々當社の地は神功皇后三韓征伐の御時龍舟を懸けたまひし旧跡也⁽²²⁾」とあり、この古事が転じて神輿を激しくぶつけあつてているという口伝、および、「ごうなおとし（ゴイナオトシ）⁽²³⁾」という神事が伝えられる。

激しくぶつけ合うほど神意にかなうとされる。これは「王権を守護する神」の性格に適う伝承と考えられよう。

後者においては、第2節で論じた18・19世紀における播磨国的情勢、特に姫路藩寛延一揆のなかで、民衆たち（氏子）の社会への不安や不満が近代に向かう社会変動の時代を経て、「ぶつけ合う」という行為に変遷していったものと考えられる。宝暦8年（1758）「規式定」第7条と第12条における記事は、この時代の不安やストレスを八幡神という性格とともに無意識的に自覚化されていったのではないだろうか。

最後に、例大祭の歴史を教材化していく意図を確認しておく。例大祭は長い歴史のなかで、「氏子中心の祭礼」「氏子の合意形成に基づく祭礼」へと変化していく。宝暦8年（1758）「規式定」の時点では、すでに民衆たちが主体になった祭礼となっていることが理解できるだろう。中世における放生会が本所である石清水八幡宮の神事が主であったと考えられるが、近世での祭礼執行へと変遷するにしたがって、徐々に民衆たち（氏子）主体の祭礼に変化していったものと推察できる。こうした民衆たちが主体になるということ自体、「王権に反逆する神」の性格を有することに至るのは必然であり、姫路藩寛延一揆との思想的関連があることは想像に難くない。未来が見通せない現代社会において、社会の成員である私たち共同体に大きな示唆を与えてくれるのではないだろうか。

社会科は「多様性と社会変革のための社会科」という機能や目的を有していると説明されることが多い⁽²⁴⁾。一人ひとりが科学的な思考力をもち、社会から精神的に自立し、他者と協働しながら社会に参加していくべきだという主張である。筆者も社会科の機能は、構成員間の多様性を受け入れ、既存の観念やシステムに挑戦していく重要な人権教育を支える側面を有していると認識している。

社会科歴史学習において、時期・推移などに着目して捉え、類似や差異などを明確にし、事象同士を因果関係などで関連付ける「歴史的な見方・考え方」は前述した社会科の機能や目的を達成していくために重要な要件となる。本授業構想をさらに精緻化し、具体的な授業モデルの構築へと進めていきたいと考えている。

【註】

- (1) 石清水八幡宮別宮としての松原八幡神社のこと。
- (2) 拙稿「神輿渡御神幸祭としての松原別宮放生会－淨穢觀念を看破する社会科授業開発のための前提的作業－」(『人権教育研究』23巻、日本人権教育研究学会、2023年)。
- (3) 『飾磨郡誌』(名著出版、1983年) 151頁。
- (4) 応永3年(1396)9月の奥書のある「播州飾磨郡松原山八正寺神事軌式之龜鏡」(松原自治会所蔵)に「がうなおとし」神事の記述が残っている。なお、本史料を検討された寺脇弘光氏によると、本史料の成立を17-18世紀と推察している(寺脇弘光『松原八幡神社秋季例大祭の歴史—旧松原村を中心とした「灘のけんか祭り」のあゆみ』灘の松原自治会、1995年)。また、姫路市妻鹿連合自治会広報委員会・「昭和のあゆみ・妻鹿」編纂委員会編『昭和のあゆみ・妻鹿』(姫路市妻鹿連合自治会、1988年)35頁に、神輿をぶつけあう行為と古事伝承との関係が記述されている。
- (5) 『吏部王記』(続群書類從完成会、1974年)天慶8年8月2日条。
- (6) 『新訂増補国史大系』第9巻(吉川弘文館、1964年)109頁。
- (7) 飯沼賢司「八幡神と神輿の成立－宇佐宮の女禰宜と『御驗』(みしるし)の関係－」(『歴史評論』550、歴史科学協議会、1996年)。河音能平「村落の政治的編成」(日本村落史講座編集委員会『政治I』雄山閣、1991年)。同『中世村落社会の首都と農村』(東京大学出版会、1984年)第1章。
- (8) 『本朝世紀』天慶8年8月3日条(『新訂増補国史大系』第9巻、吉川弘文館、1964年、110～111頁)。
- (9) 『本朝世紀』天慶8年7月28日条、天慶8年8月3日条。
- (10) 黒田日出男「田遊び論ノート」(『民衆史研究』8巻、民衆史研究会、1970年)。
- (11) 「規式定」は松原自治会所蔵にかかるもので、『松原八幡神社史』(松原八幡神社氏子総代会、2001年)に収載されている。また、現代語訳されたものが寺脇弘光氏によって解説が加えられて公刊されている(寺脇弘光『松原八幡神社秋季例大祭の歴史：旧松原村を中心とした「灘のけんか祭り」のあゆみ』(灘の松原自治会、1995年))。本稿では前者の写真版を翻刻・使用している。
- (12) 松原八幡神社絵馬堂所蔵史料。幅632cm×高さ146cmの横三枚による合板絵馬。「嘉永四歳六月中旬 御宮大工棟梁 松原村住 岡本勘左衛門重近体勘治良」の墨書きがある。本史料データは姫路市文化財図書調査員の今藤久夫氏に史料提供を頂戴した。深甚なる学恩に心から感謝の意を申し述べたい。
- (13) この点は今藤久夫氏にご教示いただいた。深甚なる学恩に心から感謝の意を申し述べたい。
- (14) 祭礼絵馬に「ケンゴー」は描かれていがないが、「シデ」によって神輿を支えるなどを行っていた可能性もある。しかし、現在のシデの長さでは神輿を支えることは困難であろうと推察される。この点は今藤久夫氏にご教示いただいた。学恩に深謝したい。

- (15) 『姫路市史』第3巻（姫路市、1991年）第4章。
- (16) 『昭和の歩み・妻鹿』（姫路市妻鹿連合自治会、1988年）35頁に、「『灘のけんか祭り』は住民が自主的に参加し、参加者も地位や身分、貧富などの差別をする事なく、一人一人が郷土を誇りとして、住民が一体化し、エネルギーを爆発させている祭りが『灘のけんか祭り』なのである」と記されている。これは『本朝世紀』にみられる「道俗男女貴賤老少」「郷々上下貴賤」の記述に重なると考えられる。
- (17) 星瑞希・小野創太・松村一太朗・渡邊和彦「現代社会における歴史論争問題に取り組むための授業構成－セイシャスらの『歴史的思考プロジェクト』に着目して－」（『社会系教科教育学研究』32号、社会系教科教育学会、2020年）。
- (18) この星瑞希らの議論は科学研究費助成事業基盤研究（C）「近世身分制研究の成果を生かした歴史学習プログラムの開発」で共同研究を行った山内敏男氏からご教示をいただいた。この「変化」と「継続」の視点から学習を行うことが学習者の歴史的な見方や考え方を成長させることができ、開かれた判断を可能にできると考えている。
- (19) 塙保己一『群書類従』第20輯（続群書類従完成会、1977年）12頁。
- (20) 中野蟠能『八幡信仰』（塙書房、1985年）。
- (21) 前掲飯沼論文。
- (22) 註3と同じ。
- (23) 註4と同じ。
- (24) 「社会化の作用に対抗」していくことに社会科の主たる機能を求める立場。対抗社会化は米国の研究者Engle.S.HとOchoa.A.Sが提起した概念。

「灘のけんか祭り」を学んで

播磨史ヒストリア

和田幸司ゼミ

金澤 悠斗

1. はじめに －これまでの学び－

これまで私たちは「灘のけんか祭り」について、ゼミ時間に『松原八幡神社秋季例大祭の歴史 - 旧松原村を中心とした「灘のけんか祭り」のあゆみ』を資料として、「灘のけんか祭り」の歴史的な部分を学んだ。特に「なぜ神輿をぶつけ合うようになったのか」をテーマに本を読み進めていった。

まず、「灘まつり」は1000年以上の遠い昔に始まった古い歴史のあるお祭りであるが、最初は放生川（旧松原川）にあらかじめ捕まえておいた魚や貝を解き放すといった行事だった。しかし、時代が変わり、当時の社会の情勢などから様々な形へと変化していく。

例えば、中世の鎌倉時代になっても、さらに盛大に行われるようになったとの記述があった。そこで注目されるのは放生会の祭りで「流鏑馬」が行われるようになったことである。流鏑馬とは武士が馬を走らせながら馬上から鏑矢を射る弓技で、当時は馬を走らせる馬車の走路脇に的板を立て、狩衣に簾をつけた姿の武士がこの的板を射ると言うのが通例となっているなど、時代によって少しづつ変わっていることが分かった。

2. なぜ神輿をぶつけ合うようになったのか？

学びを進めていくと宝暦8年の「八幡宮御神事御規式定」があることが分かった。以下にその資料の現代語訳をあげる。

- ・神輿をかつぎ上げる際、警固（警護役）の者は杖を神輿に突き立ててはならない。
- ・毎年三基の神輿の順序の違いが生じて喧嘩口論が発生し、神輿のお還りが遅れている。今後、そのような無法なことをしてはならない。もし喧嘩口論が発生した時は、双方とも床屋・組頭の越度（落度）とする。
- ・御宿殿において神輿を荒くかつぎ上げるので、神輿と御宿殿がとても損傷して

いる。このようなことは絶対に止めるよう氏子たちに申し付けておくこと。とくに御宿殿において神輿を練ることは絶対にしてはならない。

- ・桶を踏みつけて壊すことが近年多くなってきた。今後そのような無作法なことをしてはならない。もし半切（桶）を損じた場合には、その村が必ずまどう（弁償する）ようにしなければならない。

つまり、お祭りにおいて、「喧嘩口論」の発生がしていることが分かり、このような特異な性格が、この時代にあらわれ始めたように感じた。そして、最後の記事には相撲興行にともなう「喧嘩口論」にふれており、「当社御祭礼、人多ク相集リ候ニ付、喧嘩口論心無キ件、之レニ依リ相撲興行止リ候」と相撲興行を中止したことが述べられていた。このような喧嘩口論は、近世後期から多発して問題化していたことが分かった。

しかし、なぜこのようなことが起こったのだろうか。

それはおそらく当時の社会の情勢が現代に少し似ていたと私は考える。当時は作物の不作があり、相当なストレスが民衆にあり、それが引き金となってお祭りに自身のストレスをぶつけるようになったと思う。現代では新型コロナウィルスの影響により、ネットでは誹謗中傷が一時期、問題になっていた。そのような社会現象が、だんだんと形を変えて今の「灘のけんか祭り」になったと考える。

3. おわりに　－今後の課題－

この学びを後世に伝えるためにはどのようにすればいいのだろうか。私は小学校教諭を目指しているため、学校の授業を通して「灘のけんか祭り」の歴史的な部分を学んでほしいと考えている。学校の授業の科目には「総合的な学習の時間」という授業がある。その授業では子どもが主体的に学習でき、教科書も無く、各学校で自由に単元を設定できる。その時間を活用して「灘のけんか祭り」について調べることが出来ると考えた。

地域の歴史家に来てもらい、授業をして学びを深めたり、実際にフィールドワークをして「灘のけんか祭り」の会場に校外学習を行ったり、ICTを活用してまとめ学習をしたり、調べたりなどを行うことができると考えた。

実際に和田幸司先生が妻鹿小学校で5、6年生を対象に灘のけんか祭りについての授業をした際には、子どもたちは主体的に意見を言っていた。そして、話し合いの時も立つ

て指をさしながら話し合いを行うなど、子どもたちから強い真剣さが伝わってきた。やはり、地域の子どもたちは「灘のけんか祭り」が大好きなようで大変楽しく学びが深い授業だったと感じた。

この一年間を通して、「灘のけんか祭り」は地元の団結力が非常に強いと感じた。自分の生まれ育った故郷を継いでいくのは未来の子どもたちである。このお祭りを通して故郷で育ち、故郷を作るといったサイクルがしっかりと出来ていることが重要だ。

「灘のけんか祭り」を学んで

播磨史ヒストリア

和田幸司ゼミ

田村 渉

1. はじめに

私は、最初「灘のけんか祭り」はどんな祭りか知らなかった。動画を見て神輿と神輿をぶつけ合う祭りという認識で、とても怖いと最初は思った。しかし、専門研究をしていく中で「灘のけんか祭り」がどのようにして行われてきたか、何故けんか祭りといわれているのかについて興味がわいてきた。

2. 「灘のけんか祭り」と石清水八幡宮

「灘のけんか祭り」は、鎌倉時代より昔の時代に行われた。その時はまだ、けんかは行われていなかった。江戸時代ぐらいから行われるようになったのではないかと考えられる。

「灘のけんか祭り」は京都にある石清水八幡宮の派生にあたいるものであり、最初は三台の神輿を担ぎ山を降りるという事で災厄や疫病から守るために行われていたが、近世末期のころ、若い衆達が暴力や暴言などが出始めたことがあり、それを止めようと「八幡宮御神事御規式定」が定められた。そこには16か条の制約に書かれていた。では何故このようなことが起きたのだろうか。その時の姫路藩は台風や天災で疲弊しており、加えて朝鮮通信使の招待のために、民衆から年貢をかなり取り立てていた。そこで、姫路藩寛延一揆がおきる。こうした社会情勢の影響があるかもしれない。

石清水八幡宮と「灘のけんか祭り」は深い関係がある。それは、放生会という行事において関係があった。著名なのは宇佐八幡宮と石清水八幡宮である。石清水八幡宮は、宇佐八幡宮が日本の中心に進出する形で創建された神社であり、この石清水八幡宮の放生会（神幸渡御）を天皇の行幸に準じた様式で行うことが認められるほど盛大で格式の高いものであった。約500年の長い間、松原八幡宮の氏子地域に該当する松原荘の荘園領主であり、松原八幡宮と石清水八幡宮は深い関係があった。

3. 「灘のけんか祭り」の変化

「灘のけんか祭り」は、千年以上前に始まった祭りで、色々変化してきている。まず、祭礼日が変わった事だ。明治6年までは、祭礼日が9月15日だったが、現在は10月15日に変更されている。

次に、祭礼様式の変更についてである。祭礼様式とは、祭礼行事の形やプログラムを表すが、昔から神輿のぶつけあいはなかったと考えられる。おそらく、「灘のけんか祭り」の祭礼様式は、明治以前には、神輿を中心にその前後を礼服に威儀を正した神役人達が社宝や武具を奉持し、伶人たちが管弦の雅楽を奏でながら厳粛に御旅所まで神幸渡御をするのが基本的な形であったと思われる。もともとは、あらかじめ捕まえていた魚や貝を放生川の川口で解き放ち自然の海や川に戻す儀式ではあった。これを放生会という。

鎌倉時代になると、流鏑馬行事が御旅所前面の馬場で行われるようになり、江戸時代になると獅子屋台や神輿太鼓、仁輪加檀尻などが、神幸渡御に加わり、村によっては、神輿太鼓を出すようになった。その反面、厳粛に行われてきた神輿かつぎの作法が荒々しくなったと考えられる。

放生会についてであるが、松原八幡宮の放生会には三つの時代に分けることができる。放生会がいつ始まったのかは定かではないが、10世紀には、放生会が始まったことが考えられ、松原八幡宮から御旅所の宿院殿までの神幸渡御が行われ、放生川の川口で魚貝類を放す儀式を執行したと考えられる。鎌倉時代には流鏑馬を主にした放生会であったと思われる。武家政治を始めた源氏の氏神が八幡神であり、武人の神として武士階級に崇められたことによりものだろう。鎌倉時代以降の放生会については、旧暦にあたる例大祭に行われたと思われる。その際には神輿あわせは行われていない。

4. おわりに

私が課題として挙げることは4点ある。

第一に何故けんか祭りといわれてしまっているのかである。地元の方は、「灘祭り」というので、地元の外からだと「けんか」を入れて祭りと言っていて、その違いは何なのだろうか。第二に何故神輿同士をぶつけ合うのかである。近世末期以前は、神輿を担ぎ宿院殿に向かい、厳粛に正された祭りだったのに、なぜ3つの神輿をぶつけ合うことをしたのだろうか。第三に放生会や例大祭について、放生会は何故変わる必要があった

のかである。第四に例大祭を支えた人たちについてである。地元住民の協力がどのようになされていったのかを調べたいと感じた。

私は「灘のけんか祭り」について色々なことを調べてきた。地元の人がその祭りに対して、とても熱があり他の村に負けたくない思いや、この祭りを成功させたいという気持ちがあることが理解できた。それは地元のこどもたちにも影響を与えている。この祭りに参加したい子どもたちや、この祭りを絶やさないよう自分も協力したい子どもたちもいて、この祭りは、大人だけではなく、子どもたちにもこの熱い気持ちが伝わっている。

最後になったが、これからもこの祭りを調べて、専門家の人に話を聞いたりしていきたいと思った。

